

エホバの証人と信仰を起因する児童虐待
—複雑性 PTSD との関連性も踏まえて—

社会福祉学専攻 菊地 幸世

要約

・問題意識と目的

親ガチャという言葉は少なからず、宗教 2 世たちの告発が影響していると思われる。2024 年のある調査では「児童虐待 Q & A」の発出の前後にかかわらず、「特に変化はない」と回答した児童相談所が 7 割以上であった。その理由に、信仰を起因とした児童虐待（宗教虐待）が未だに社会に認知されていないことが読み取れる。これでは、「児童虐待 Q & A」を発出したものの、宗教虐待に悩む子どもを十分に支援できるのか疑問である。むしろ、この調査結果から、「児童虐待 Q & A」には不備な点があると思われる。そこで、「児童虐待 Q & A」の作成にあたり、エホバの証人の 2 世信者からの意見も参考にしたこと、『宗教団体「エホバの証人」における宗教の信仰等に関する児童虐待等に関する実態報告書』（2023）の量的・質的な調査を参照できること、輸血拒否等の問題についての判例等といった文献があることから、本論文ではエホバの証人を主軸に置き、分析を行った。そこで、明らかとなった課題を解決するためにどのようなことができるのか記述し、児童相談所等で働く方等が宗教虐待の当事者と対面された時の対応の一助として活用されれば幸いである。

・研究の方法

具体的な研究の方法としては、「児童虐待 Q & A」に記載されているものが虐待かどうかを判断するため、『宗教団体「エホバの証人」における宗教の信仰等に関する児童虐待等に関する実態報告書』（2023）をはじめとした調査や『子どもの虐待診療の手引き改訂第 3 版』（2022）、『子どもの虐待防止・法的実務マニュアル【第 7 版】』（2021）、『宗教的輸血拒否に関するガイドライン』（2008）等の様々な文献を比較しながら、分析を行っていきたい。

また、文献検索のため Google scholar や SINIIResearch、国立国会図書館等を活用した。

・結果と考察

本論文では、エホバの証人が教理に基づく行為が虐待かどうかについて、輸血拒否の問題と鞭打ちの問題を例に挙げ判断した。これらから、双方とも虐待と判断することは妥当であるとの結果を示した。また、エホバの証人内部で虐待が過激化していったことの一因として同調圧力が影響していることが明らかとなった。しかし、同調圧力が悪い

と決めつけて否定するのではなく、同調圧力のベクトルの方向を変えることにより、同じような経験をした人と共に宗教2世の抱える精神的な不調の緩和に繋がるのではないだろうか。このベクトルの方向を変えるというのが宗教2世の自助グループの活動であると解釈できる。

自助グループの活動においては横道誠氏を中心とした「宗教2世の会」を事例に挙げた上で、自助グループ内での語り合いは認知の歪みの修正を可能とし、それは持続エクスポージャー法と同様の効果を発揮すると考えられる。そのため、宗教2世の支援の1つとして持続エクスポージャー法を援用した自助グループの活動は自分の過去を振り返り、しつけや教育の一環として行われていた行為は虐待であると認識を改められ、グループの活動を通してそれらの認識を修正することで、精神的な不調の解消だけでなく、これらのことをきっかけに他の支援にもつながられるのではないかと考察した。

・まとめ

本論文では、エホバの証人を主軸として虐待の検証を行った後、その支援方法についても触れた。その結果、輸血拒否の問題と鞭打ちの問題、双方とも「児童虐待Q&A」にあるような虐待と確認できた。そして、多くの宗教2世が複雑性PTSD等の精神的な不調を抱えている。そのような精神的な不調を緩和するため、持続エクスポージャー法を援用した自助グループの活動の効果が期待できる。しかし、「児童虐待Q&A」の不備として、発出からまだ日が浅く、宗教虐待かどうかの線引きの難しさや支援者側の宗教虐待についての知識不足、宗教虐待の事例自体が少ないといったものがあることが分かった。これらを踏まえた上で、ミクロ・メゾ・マクロ的な支援をこれからも考えていくべきである。